「日々の理科」（第 2794 号） 2022,-3,30

「二度上峠のカモシカ（２）」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中　千尋　Chihiro Tanaka

二度上峠（にどあげとうげ）は、高崎市倉渕（旧倉渕村）と長野原町北軽井沢の境にある、群馬県道 54 号線が通る峠だ。高崎市側は、ほとんどがスギの植林に囲まれていて、ところどころ伐採された場所もある。カモシカは、そのような開けた場所を好むようだ。この日も、人工林を伐採した跡に、一頭のカモシカが「たたずんで」いた。

森の中にいたら、まず気づかなかっただろうが、これならだれでも気づく。私は路肩の安全な場所に車を停めて、しばらくこのカモシカを観察することにした。

シカやイノシシなら、まちがいなく猛ダッシュで逃げ出す。しかし、このカモシカは、私が車の外に出て車のドアを閉めても、微動だにしなかった。ゆっくり逃げようともせず、威嚇して向かって来る様子もまったくない。まさに「アオの寒立ち」の状態である。私はもう少し近づいてみることにした。

私がゆっくり近づいても、こちらをじっと見つめたまま、動かない。まるで博物館の「剥製」のようだ。時々耳が動くので、剥製ではないことがわる。

完全に「目が合って」いる。「お前は誰だ」とも聞こえるし「早く立ち去ってくれ」もととれる。恐らく「ここは自分の縄張りだから、邪魔しないでくれ」とでも思っているのだろう。

動物と目が合うと、そのこと自体が「戦い」になる。「目をはずしたほうが負け」となるような気がした。勝負は、私の負けだった。私が一瞬視線をはずした隙に、カモシカのほうもそっぽを向いた。その後、勝ち誇ったように、ゆっくりと山に去っていった。